Chapter 2 : **ダークネス・ロード覚醒 パート1**

雨はまるで不吉な囁きのように降り注いでいた。

街の外れ、バウンティハンターのゲッコウガは、濡れた影をまといながら静かに歩いていた。口元のスカーフをきつく締める。  
その足が止まる。見上げた先に、あった。

黒紫のエネルギーを放つ、異形の黒い城。

中から響くのは、耳を覆いたくなるような声──

｜「期間限定レイドパック！ドロップ率2倍、後悔3倍！」  
｜その後に続くのは、隔絶と自尊で歪んだダークライの不気味な笑い声。

ゲッコウガは目を細める。「…あいつが戻ったか」

迷いなく、水気の漂う霧に身を溶かして消える。  
警告しなければならない──この街に。そして何より、信頼するパートナーであり恋人でもある占い師のマフォクシーに。

彼女は…すでにこの未来を視ていた。いつもそうだ。

マフォクシーの温かな小屋の中では、タロットカードと薬草のお香のそばでロウソクが揺れていた。  
マフォクシーの正面にはアマージョが座り、まるで根を張るように脚を組み、静かに瞑想している。

｜「マンゴスチンの種を丁寧に植えることよ」と、マフォクシーが優しく語る。「とくに、この雨月の間に植えれば…収穫は倍増するわ。  
｜実りも…コインも、2倍。」

アマージョは微笑み、興味を持ったその瞬間──  
風を巻き込みながら扉が勢いよく開いた。

ゲッコウガが濡れた身体のまま現れ、鋭い目で言い放つ。「戻った。あの黒き夢喰いが。」

アマージョがまばたきする。「誰のこと？」

間髪入れず、マフォクシーが答える。

｜「ダークライよ。また何かを築いている。そして今度は…機械が喋っている。」

ゲッコウガが頷く。「あの詐欺セール城…幻なんかじゃない。街を餌にしている。」

マフォクシーは目を閉じる。「彼を止められるのは、たった一匹だけ。バンギラス…その岩の拳こそ、予言の最後のカード。でも…あの子は信じない。」

アマージョは不安げに嵐の外を見つめる。「それじゃ…あたしたちはもう詰み？」

マフォクシーは立ち上がり、アマージョの肩に手を置く。

｜「濡れずに…種を蒔き続けなさい。運命は、忍耐を選ぶわ。」

アマージョは困惑したまま、小さな種を握って雨の中へ出ていく──  
それが馬鹿げた話なのか、あるいは本当の予言なのか、答えはまだ見えないまま。